

まで言われたが、大正八年八月に解散した。翌九年二月二十一日には鶯谷の伊香保で広業忌が営まれ、次いで五月一日から一週間、天籟会主催の広業遺墨展覧会（竹の台陳列館）があり、その十一月には天籟会編の『広業偉観』が発行された。なお、外に作品集としては広業の生前に審美書院から発行された『広業画譜』一、二（明治四十三年、大正六年）がある。ところで、本校の教官、旧教官が死去した際には校友会月報に追悼記事が載るのが常であり、広業のような大家はなおさらである。しかし、それが無いところを見ると、編者が失念してしまつたらしい。

④ 工芸部改革の検討

大正五年の東京美術学校改革運動以来、根本的改革の必要性が指摘されていた工芸部（図案科第一部、金工科、鑄造科、漆工科）では、種々協議を重ねた結果、同八年三月にまず教育課程の改正案である「工芸美術部仮規定」をまとめた。その要旨は学科課程を普通科二年、本科三年とし、普通科で美術に関する基礎教育（日本画・鉛筆画・水彩画・木彫・塑造等の実技と美術史・工芸史・風俗史・用器画・文学等の学科および修身、体操を十分受けたあとに本科へ進み、専門の技術を学ぶこととし、また、生徒は美術部の学科の聴講もできるようにするといふものであった。本校創設当初の規則では普通科二年、専修科三年とされ、基礎教育重視の方針がとられていたが、工芸部では今回この方針を復活することに決したのであった。

工芸部におけるこうした改革の試みは世の関心をひき、新聞にも次のように報道された。

○革新の手入が始まる

時節到来の美術學校

大缺陷と云はれて居た工藝部の教育方針一新

彫刻圖案鑄造三科の動搖

多年懸案の東京美術學校革新問題も今回正木校長英斷の下に愈々解決される時機が来たやうである、革新と云つても日本畫科、西洋畫科（、図画）師範科等には殆んど關係がなく矢張り同校の最大缺陷と云はれて居る彫刻科圖案科鑄造科の上に係る問題である

先づ改革の手は第一に工藝部全體の教育制度の變改から着け始められた、從來工藝部は五箇年修業中豫備教育が三箇月、實技教育が四年七箇月であつたが最も美術家らしい實技家を養成すると云ふ新方針の下に此四月から豫備的美術教育を二箇年に實技教育を三箇年に變改實施する教育の根本的刷新で非常な進歩と云つてよい、次に來るべきは鑄造科圖案科及び美術部中彫刻科の人の問題である 聞く所に依れば鑄造科主任櫻岡（三四郎）教授は病氣隱退、助教津田信夫氏は教授に昇進と決定近々發表の筈、又櫻岡氏の後任は英才香取秀眞氏を抜く爲め目下同氏に交渉中である、圖案科では四圍の事情上島田（佳允）主任教授の隱退となるべく後任として學校出身の英才小幡恒吉、十二町貞吉、澤田誠一郎三氏が數へられ其中小幡氏の呼び聲が一番高い、建築圖案科及び金工科も多少の動搖はあるが建築科に古宇田實主任があり金工科に海野美盛主任が居るから、大した改革の餘地はあるまい、最後に難物中の難物は彫刻科であるが、今度彫塑部主任の白井雨山氏が急

に木彫部専務に移った〔正しくは予備科木彫担任兼務〕のは纏て彫刻科大革新の前提とも見るべく、彫造部主任に朝倉文夫氏の呼び聲最も高く同氏も既に下交渉を受けた形跡があり條件次第では氏の學校入りが實現されやうが、何分難かしい此科のことで、今の所どう變化するか一寸豫想されぬ

（大正八年四月二十一日『大阪時事新報』）

しかし、この学科課程改正案は翌大正九年二月の工芸部教官會議で普通科一年短縮案へと修正され、また、他科との關係を調整する上で支障が生じたらしく、最終決定は大正十二年の本校規則大改正まで持ち越された。

ただし、上記の記事において指摘されている人事上の改革はむしろ自然に進んだ。金工科では大正八年四月に教授平田宗幸が病気で辞任し、海野清と神矢教親が助教となり、五月、山本正三郎が講師となり、九月、教授海野美盛が死去し、十一月、清水亀藏が教授に起用された。鑄造科では七月に桜岡三四郎が病気で辞任し、十一月、津田信夫が教授に昇格。七月には杉田精二が講師に採用されている。図案科でも今和次郎、齋藤佳三〔戸籍上は佳藏〕の二人が講師として採用され、工芸部教師の顔ぶれは大分新しくなった。上記の記事中にある彫刻科の改革は大正九年に実施される。

⑤ 今和次郎、齋藤佳三、山本正三郎の起用

装飾美術家協会や工芸美術会が誕生する大正八年は、工芸、デザイン運動が高まりを見せた年であったが、本校にも刷新の機運が興

こり、その手始めとして五月二十二日付で、図案科に今和次郎と齋藤佳三、金工科に山本正三郎が、講師として起用された。大正八年六月一日の『大阪時事新報』に、「新に美術學校に加へた三權威」の見出しで、この三人の起用が紹介されている。

「三氏はいづれも同校出身の逸材で斯學の權威者、齋藤氏は衣服論、意匠學の二科を、今氏は西洋模様學、住宅論の二科を、山本氏は彫金實習を擔任することになつた、右に關し同校幹事大村西崖氏は語る『從來島田教授が擔任して居た圖案法を更に分科して新に講座を設け齋藤今二氏が夫々擔任することになつたのである、齋藤氏の衣服意匠學には世既に定評あり今氏の西洋模様學も亦我邦では氏の右に出る者なしと云ふ程で兩氏共に斯道の權威である、山本氏は特に西洋打出即ちスナールング片切法即ちイングレヴィングにかけては唯一の人である、今回此三氏が同時に教鞭を取られることになつたのは本校に取りて洵に慶ぶべきことである』と（東京電話）」

また、今和次郎の記すところ（『考現学 今和次郎集第1巻』昭和四十六年一月）によれば、

「洋劇、翻訳劇がしきりに流行していた大正末から昭和のはじめにかけてのことだった。上野の美校（現芸大）で、西洋ものの舞台の時代考証、つまり、住居、家具、小道具、衣装などの講義をやつてくるといふ学生たちの要望に學校が応じて、非常勤講師という格で、あいつならばという声にうっかり私がひっかかってしまったのだ。さあ、それから一〇年間ばかりは、勉強させられたものだった。